

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 鄭 榮植

禅は東アジアの仏教の実践思想としてもっとも中心となるものであるが、その異文化間における継承・展開という観点からの研究は必ずしも十分ではない。本論文は、公案禅(祖師の言動を問題として与える禅の指導方法)について取り上げ、その中国から韓国(朝鮮)への展開を明らかにしている。公案禅は中国の宋代に確立したものであるが、韓国や日本にも大きな影響を与えている。本論文では、第1部で公案禅を確立したとされる大慧宗杲(1089-1163)を中心として、中国におけるその展開を解明した上で、第2部で韓国禅におけるその影響・発展を論じている。

第1部では、まず大慧の生涯と『大慧語録』の成立を論じたうえで、大慧の思想の基盤として、『華嚴経』と『首楞嚴経』というふたつの經典の影響を取り上げ、さらに大慧が生死や浄土という通仏教的な問題をどう扱っていたかという点を明らかにしている。その上で、公案禅の問題に進み、大慧が悟りに至るもっとも効果的な方法として公案禅を採用したいきさつを明らかにし、さらに、もっとも代表的な公案である無字公案について、その成立と展開、及び変化について詳細な検討を行なっている。第2部ではまず、いまだ公案禅が導入されない初期(新羅~高麗中期)の韓国禅の形成を、九山禅門を中心に概観した後、韓国禅の確立者である普照智訥(1158-1210)とその弟子真覚慧謙(1178-1234)を中心に、公案禅の受容と確立の様子を明らかにし、いずれの場合も大慧の影響が大きいことを論証している。特に、従来韓国禅の特徴として頓悟漸修ということが言われるのに対して、そのような面はありながらも、大慧の影響によって、それよりも公案禅を上においていることを明確に指摘する一方、大慧が唐代以来の無事禅を批判するのに対して、智訥や慧謙には無事禅的なところが同時に見られるという、両者の相違点も明らかにしている。

以上のように、本論文は、従来必ずしも明らかでなかった中国禅の韓国への展開という問題を、公案禅に焦点を当てることによって明確に示し、とりわけ大慧の影響と、他面、大慧と必ずしも一致しないところを的確に指摘したところに、大きな成果が見られる。大慧自身の思想に関しても、従来必ずしも十分に解明が進んでいるとはいえない中で、本論文は、その語録や著作を読み込んで、その思想の基盤を明らかにしている。東アジアの文化交流という大きな視点から見ても示唆に富むところが少なくなく、今後、日本の場合も考慮に入れれば、より一層の研究の広がりが期待される。やや論述に粗い点が見られ、特に第1部で大慧の教学的問題について扱っているところが必ずしも後のほうの論述に結びつかないなどの構成上の欠点が見られるが、その成果に鑑み、博士(文学)の学位を与えるのにふさわしいものと判断する。